

庄内協同ファームだより

No.135 2011年8月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



つや姫の圃場(葉色測定器で穂肥の時期を調べています)

3・11東日本大震災により、被災された皆様衷心よりお見舞い申し上げます。

あの日は北海道の叔父の不幸の連絡を受け、朝早くから旅の準備をしていました。飛行機で行こうと仙台空港に行ったほうが良いか秋田空港に行ったほうが良いか悩んでいましたが、当日の朝は大雪で玄関の前には30cm位積もってありました。山形道(高速)で便数の多い仙台空港へとも考えましたが一週間位前に山形道でナダレが発生し通行止めになったのを思い出し、海岸線を走る国道7号線で秋田空港へと向かいました。なんか変に胸騒ぎがして、還暦のお祝いでも頂いたお守りを二つも持っ

て出発したのです。お守りのご利益があったのか飛行機もJRも震災の影響なく目的地へ着くことが出来ました。仙台空港だったら車は津波に呑まれたらどうと今考えても恐ろしくなります。

さて、今年の稲作ですが冬は大雪、春も天候不順で育苗の時期も寒く、日照不足の日が続く、苗質はあまり良くありませんでした。平年より遅れぎみにスタートした田植えでしたが5月、6月は順調に天気も回復し、稲の生育も6月下旬には平年並みに回復しました。今年の梅雨は短期間で終わりましたが6月23日、30日には大雨のため長時間灌水した圃場が見られました。

7月に入り猛暑が続く、台風8号の影響が7月20日頃から風速10m強の東風が4〜5日間吹き荒れ、稲の葉先が傷つき田んぼ全体がまるで収穫時期になったかのような色に変わりました。稲の体の中では幼穂が成長しているとても重要な時期なので収量に影響しないか心配される所です。7月末には猛暑から一転、また東風が強く吹き秋のような涼しい朝夕になりました。今年の夏は今まで経験したことがない変な夏です。やはり異常気象なのでしょう。

我々農家は天候に左右され、その時々打てる最善の栽培管理をしようと思えますが農家自身ではどうにもならないのが福島原発の放射能問題です。本県でも皆様の不安払拭のためコメ収穫時に放射性物質検査を実施することが決まりましたよつです。

安全、安心、おいしさを求めて我々も全力で頑張りますので、どうぞ今後ともファームのお米、お餅、枝豆、麦茶等の加工品のご愛顧を宜しくお願い申し上げます。

理事 工藤 広幸

生産者と消費者の田植交流

つや姫圃場（5月21日、22日）

毎年産地交流の一環として、生協の組合員とその家族及び職員が私達の有機圃場で春は田植、秋は稲刈りを通じた産直交流を行っております。今年で9年目を迎えます。

苗の植え付けの位置が判るように昔ながらの型枠を使いました。夜は生産者と消費者の夕食を共にした懇親会です。今年、あの忌々しい大震災や原発事故もあり、放射能の話題が多くなりました。



意外に疲れなかった型枠作業



田植前の説明を聞く参加者



庄内協同ファームの生い立ちを説明する五十嵐代表



夕食を囲んだ懇親会



裸足で田んぼの中へいよいよ草取り開始です。



初めての草取りに夢中です。



慣れない田んぼの中で苦戦するかと思いましたが、結構様になっています。珍しい、ナマズの子供を捕まえました。



網とカゴを持って田んぼの中へ、一列に並んで生き物調査開始です。記念撮影（良い汗をかきました）

農作業体験研修と 生き物調査活動

7月1日、2日

生協職員の産地体験研修として有機の圃場で草取りと生き物調査活動を行いました。大雨による列車の運休でバスへの乗り換えというハプニングにも関わらず、到着早々職員の皆さんには、真剣に草取りをして頂き、田んぼもきれいになりました。2日目の生き物調査ではイトミミズ、アメンボ、どぶシジミ、アマカエル等たくさんの生き物を観察することが出来ました。又地元でも珍しい(ナマズの子)も発見できました。職員の皆さんは生き物調査が初めとの事で、貴重な体験のみならず今後の生協活動の一助にでもなれば嬉しい限りです。



庄内産「だだちゃ豆」

2011年の枝豆は去年の猛暑の影響をもちに受け、種子が良くありません。種にカビが生えたりして発芽率が悪く、幾ら播種してもなかなか芽が出てきません。

そんな中でも芽が出てきた苗をなんとか植ええました。定植後の生育は、まずまずだったのですが、今年の梅雨はジメジメではなく6月下旬と7月上旬に大雨が降り枝豆が水に浸かり元気がなくなつてしまいました。7月の大雨後例年より10日近く早く梅雨が明け、それから今度は雨が降りません。今年の雨や晴れ（暑い）は極端で農産物にとつては、泣かされる天候で、例年よりは生育が遅れているものの、それでも枝豆は大きくなっていきます。植物の生命力には驚かされます。人間は枝豆の生育のお手伝いをしているに過ぎないのかもしれない。

私たちの「枝豆」は有機栽培です。（農薬や化学肥料を使用しない）枝豆にとつてはうれしい農法ですが、同時に田んぼに生息している草にもうれしい農法です。その草を私たちは管理機で畝を作りながら除草したり、手取りをし「枝豆よ、大きく、美味しくなるんだよ」と思いを込めながら育てました。

梅雨明け後は暑い日が続く、実は小粒ではあります、美味しい枝豆になんとか成長してくれています。

今年も丹精込めて育てた庄内産の「だだちゃ豆」をどうぞお楽しみ下さい。



7月21日枝豆部会員による圃場巡回

2011年度有機認証の 監査について

有機JAS会議担当 野口吉男



今年も6月13～15日に掛けてアファスの監査が行われました。毎年監査を受けているので生産者の対応もよくなり、監査も順調に終了しました。最終会議においても、検査員より特に大きな指摘事項もなく無事終了しました。

毎年2月の栽培計画台帳等の記帳提出より始まり、10月から翌年3月の栽培実績台帳の提出と出荷後の出荷台帳一覧と最終的に収穫量・作業日誌の記入などを以って終了するわけですが、作目の増加とそれに伴って書類の方も増え何回も確認しながらデータをパソコンに入力し、計画については、アファス監査前の生産履歴委員会の内部監査時に各生産者が入力事項（栽培計画台帳）に間違いがないか確認し、栽培計画台帳の作成は終了致します。入力終了後の変更届により作付作目、品種の変更などもあり、再度データの修正を行います。

また、毎年新しい資材が出て来ておりその資材が有機に適合するかの証明確認や、以前の資材の証明を認証機関で再確認をしたりもします。生産者より栽培台帳に全資材名を正確に記入して貰う事が取引先の問い合わせ時に正確な説明にも繋がり、結果農産物や商品の信頼を消費者からも得られると思っております。他に有機JAS会議は、JAS有機ラベルの管理、各書類の管理、農産物の栽培台帳等の書式の改訂、加工関連では、製造マニュアルや書式等の改訂などを行っております。ア

ファス監査については、農産物と加工品がありますので、年間2回の監査を受ける事になります。

規程や基準の見直しも大事な作業で、法律や規則の施行・改正が毎年の様にあり、JAS法違反などの情報も常に農林水産省のHP等より入手しています。

今年は、特に大震災による原発事故の影響で、放射性セシウムが肉牛の餌の稲藁と牛肉から検出された問題で、7月22日から牛堆肥の流通が17都県で禁止されています。今後、農林水産省の堆肥中の放射性セシウムの基準が出来るまで、各農家が保管管理するとなっています。

これから、秋に向け多くの農産物が収穫を迎えるわけですが、この原発の問題は事が大きくなるだけで、一向に解決の目途が期待出来そうもありません。お米についても、一部週刊誌などでも放射性セシウムが取り上げられており、より不安を煽っているようにも思えます。本来生産者である私たちには責任はない事なのですが、なにか農家や製造元に原因があるかのような、そんな感じで受けとられているようです。問題の本質が何処にあるのか、消費者ひとりひとりがもう一度、問わなくてはならない事だと思っております。



自分の圃場で検査員の質問に答える野口さん

ペンリレー 徒然草

石垣忠彦



我が農園では町のグリーンツーリズム、地元の小・高校生などの職場体験協力の

事業所として年に数人の生徒を受け入

れている。今年は庄内農業高等学校から4名の生徒を7月上旬から8月の夏休み期間を前半、後半に分け農業指導することになった。作業内容は冬季間栽培するシイタケの菌床棚並べ、切花のトルコギキョウの定植・側芽取り、有機圃場での力モ回収の手伝い、ハウスのビニール張り換え、大豆の雑草取



り・中耕、桃の収穫作業などさまざま。小・中学生は本当の意味の農業体験程度だが、高校生にもなると考え方や話し方はもちろん体力的にも一人前であり指導する我々も楽に感じる。

休憩時、雑談を交えながら将来どのように農業に携わっていきたくかという質問をする。「東京農大が新庄農業大学校に進み専門的な知識を学んで技術指導員になりたい」、別の生徒は「介護士と調理士の資格を取って福祉施設や病院で地元の野菜を使った料理でお年寄りを元気にしたい」、また別の生徒は「自宅の育苗ハウスを利用していろんな野菜を作ってお客様が直接買いに来てくれるような産直施設を開きたい」など具体的な答えが返ってくる。

鶴岡市農家離職者等帰農・新規就農者支援事業による研修生

疋田 友己さん

農業研修生として4月から庄内協同ファームで有機・減農薬による農作物の栽培管理と農産加工の技術を学んでいます。私事です親という立場になって食事の安全性を意識し始



めたこと、虫取りが大好きな子どもに豊かな自然環境を残してあげたい、この二つを考えると自然に有機農業というものに関心を持つようになりました。そんな思いでいるときに有機農産物の生産・加工・販売で実績のある庄内協同ファームに研修生として受け入れていただきました。今は仕事を覚えることに精一杯の毎日ですが、早く慣れて私も何かの役に立てるように頑張っていきたいと思います。

研修を受けた生徒が数年後に近状報告を含め遊びに来てくれる、そんなインタシップを今後やっていきたい。



あとがき



春先の低温、降り続く雨、梅雨明け後の炎暑、そして台風がもたらした強風災害が少なく穏やかな庄内平野も今年には妙な異常続きで、特産のただちや豆が痛手を受けている。草丈が短く、さやの数も少ない。始めて以来の不作かもしれない。

期待できない畑の中で、それでも黙々と草取りに励む。出来不出来にかかわらず、できるだけ努力はしよう、そう決めて夏の陽差しを浴びながら進んでいく。それにしても被災地の農民は、今頃どうしているのだろうか。種を播くことも、育てることも、成長を見守ることも取りあげられて、すべてを呑み込んだ海をじっと見つめているのだろうか。

今年は辛い事がある毎に、3月11日の大震災を思う。あの時の惨事がつかい棒になって、日常の落ち込む心を支えている。多少の不遇など、被災地の現実を思えば些細なこと、先頃の新潟・福島の大豪雨もしかり。「まだまだまし、ここはまだまだまし。」そう言い交わすことで、辛い心を薄めていく。

決して前向きとは言えないけれど、後戻り出来ない現実と、前にも進めない厳しさの中で、もがき苦しむ人々が多く存在することを私達は、いつも心にとどめ、日々をすごしている。

それでもいつかは人々の思考の起点が、あの日から解放されて、より高く、より自由になる日の来ることを、心から願っている。

(東)